



対話

進路に関して、家族や友だちと「対話」する機会が増えるかも知れない。そんな時、なかなか自分の言いたいことが伝えられなかったり、伝わらなかったりすることがあるかも知れない。東大法学部で政治思想史を担当する宇野重規先生の文章には、それでも対話のもつ重要な意義が語られている。

＊

対話というと、とかく共感や相互理解といった言葉で語りがちである。しかしながら、現実の対話の多くは、共感や相互理解からほど遠い。いくら話しても相互の思いがすれ違い、むしろ反発や違和感を呼び起こすことさえ珍しくない。だからと言って対話が不要かといえばそうとは言いきれない。すれ違いに見えたり、反発しか生まなかつたりしたように見える対話が、実は長い時間のうちに、意味があったと思えるようになる瞬間もあるからだ。

興味深いことに、世界宗教のいわゆる「教祖」と呼ばれる人物の多くは、自分で書きおろした著作を残していない。イエス・キリストは、当時のユダヤ教による救済から排除された人々に直接語りかけ、その苦悩や苦しみに耳を傾けた。たしかにその言行は弟子たちによって記録され、それはのちに新約聖書における福音書としてまとめられている。とはいえ、彼自身はあくまで対話を重視して、著作を残すことに関心を示していない。

イエスや孔子の対話を実際に読んでみると、意外にも模範的な対話ではないことに気づく。というのも、彼らの思いは必ずしも弟子たちにうまく伝わっていないからだ。聖書の中でも目につくのは、例えば次のようなエピソードである。

イエスは処刑へと至るその後の自らの運命を予見するかのようになり、悲しみに陥る。その姿はけっして苦悩を免れることのない人間のそれを思わせる。そ

して、彼はペテロら弟子たちにこのように語りかける。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。ところがイエスが帰ってくると、なんと弟子たちはグウグウ寝ているではないか。疲れのあまりとはいえ、さすがにイエスもこれにはがっかりする。「あなたがたはそんなに、ひとときもわたしと一緒に目をさましていることができなかつたのか。」

後に使徒の筆頭とされるペテロも形無しである。それどころか、イエスはこのとき、彼に次のようにも言う。「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう。」尊敬するイエスの苦難にどこまでもついていこうとするペテロはこのとき、とてもがっかりしたはずである。しかし、実際にこの後ペテロは囚われたイエスの関係者であることが露見しかかった際、三度にわたって「自分はこの人を知らない」と言ってしまうのである。しかし、イエスはペテロを責めなかつた。

さすがのペテロもこれを恥じ、大いに男泣きする。しかし、彼が初めて使徒としての自分の使命を自覚したのも、このときであった。やがて彼は苦難の伝道の旅に出る。イエスのメッセージは最終的にペテロに届いたのである。

このやりとりは、ある種の対話の理想形に思えてならない。最初、イエスがその悲しみや苦悩の思いを伝えようとしたとき、言葉はうまく弟子たちに伝わらなかつた。が、それでもその言葉は弟子たちの心に残り、やがて彼らは師の言葉に込められた真実を知ることになる。本当に大切なことはすぐには伝わらないのかも知れない。それでも直ちに伝わらなかつた言葉は、受け手が成熟し、その機会を得たとき、突如として意味をなし、生きる意味を与えるのである。(東京書籍、「国語 NEW SUPPORT」)